

第 52 回

社会貢献者の記録



公益財団法人
社会貢献
支援財団

第 52 回

社会貢献者の記録

目次

| | |
|--------------|-----|
| 表彰選考委員プロフィール | 004 |
| 式典次第 | 005 |
| 会長挨拶 | 006 |
| 表彰選考委員長挨拶 | 008 |
| 受賞者代表挨拶 | 010 |
| 記念写真 | 012 |
| 表彰式スナップ写真 | 013 |
| 来賓祝辞 | 020 |
| 祝賀会スナップ写真 | 022 |
| 社会貢献者表彰とは | 026 |
| 受賞者手記 目次 | 027 |
| 対象となる功績内容 | 029 |
| 資料編 | 104 |

表彰選考委員プロフィール

委員長



脚本家 東北大学相撲部総監督

内館 牧子

東京都教育委員会 教育委員ほか

脚本：「ひらり」「てやんでえッ!」「私の青空」「毛利元就」「エイジハラメント」ほか多数

著書：「終わった人」ほか多数

委員



元国税庁長官

大武 健一郎

関西大学客員教授 認定 NPO 法人ベトナム簿記普及推進協議会理事長

著書：「平成の税・財政の歩みと21世紀の国家戦略」「税財政の本道―国のかたちをみすえて」ほか多数

委員



産経新聞 東京本社 編集局 副編集長

小川 記代子

委員



久米繊維工業株式会社 取締役相談役

久米 信行

著書：「メール道」「ブログ道」(NTT 出版)「NPO のための IT 活用講座 効果が上がる情報発信術」「すぐやる人だけがチャンスを手に入れる」ほか

委員



ノンフィクション作家 公益財団法人民間放送教育協会会長

吉永 みち子

「羽鳥慎一 モーニングショー」コメンテーター

「あさちゃん! サタデー」コメンテーター

著書：「気がつけば騎手の女房」「性同一性障害」「26の生きざま」「老いの世も目線を変えれば面白い」「試練は女のダイヤモンド」ほか多数

式典次第

第一部 表彰式

10：30…開 式

- ・ 会長挨拶
- ・ 表彰選考委員長挨拶
- ・ 表彰状並びに副賞の贈呈
- ・ 受賞者代表挨拶

12：20…閉 会

第二部 祝賀会

12：30…開 宴

- ・ 来賓祝辞
- ・ 乾杯のご発声

13：30…閉 宴

(2019年7月22日 於帝国ホテル東京)

会長挨拶

本日は、500名以上の皆様にご臨席をいただきまして、第52回の社会貢献者表彰式典を開催できますことを大変喜ばしく、ご支援いただいております日本財団はじめ関係各位に心からお礼申し上げます。

本日は選考委員会におきまして、選考された人命救助や社会貢献、あわせて37件の活動を表彰させていただきます。

まずは受賞者の皆様、そしてその活動を支えていらっしゃいますご家族はじめ関係者の皆様、誠におめでとうございませす。心からお祝い申し上げます。

人命救助は、強盗や傷害事件そして水害の現場で自らの身命を冒して救助された方、社会貢献は日本国内や海外において献身的に世のため人のために尽くされている方々でございます。

さて、私もその活動の意義をより一層理解するために、これまでの受賞者が活動されている現場へお邪魔させていただいておりますが、このたびも宮城県の「ホテル観洋」女川町の「希プロジェクト」「女川向学館」、千葉県の「吉成麻子さんのファミリーホーム」そして都内の「てーねん・どすこい倶楽部」や「パン工房ノアノア」など7ヶ所の受賞者の皆様を訪問致しました。

5月に伺った東京の大田区の「だんだん子ども食堂」は、八百屋「だんだん」を営んでおられた近藤さんという女性が、野菜を買いに来た小学校の先生から聞いた話で、ある母親が病気で朝晩の食事がバナナ1本の子が生徒の中にいるので、先生がおにぎりを作ってその子を迎えに行っていると。この地区でそのような子どもがいることに驚き、こうした問題は地域で取り組もうとの思いから、全国的にも先駆けとなる、子どもが一人で入れる食堂を平成12年から始められました。

訪問した食堂で、ボランティアの大学生や主婦の皆さんが、食事の支度や配膳の準備をされる中、私は、来られる方々と交流させていただきましたが、下校後一旦家に帰った後、クラスの友達同士誘い合っている子どもたち、保育園の帰りに幼児を連れた何組かのお母さん、子ども連れサラリーマン風のご夫婦などいろいろな方が来ておられたことに少し驚きました。

料金は子どもが1円から100円、大人が500円と安いという事もあるでしょうが、当初はひとりでご飯を食べている子やご飯を食べることが出来ない子どもが来ていたの



ですが、現在はその子たちは勿論、高齢者も含め様々な人が出入りする食堂になり、地域の居場所や交流の場所になりつつあるという事でした。

先般、新聞で「子ども食堂」が全国に少なくとも3,718ヶ所になったとの報道がありました。その数の広がりには驚かされましたが、近藤さんの問題に対応する行動の早さには感心させられ、今回の訪問を通じて、その実態を理解させていただいた次第です。

本日の受賞者の皆様も活動の内容は違いましても、いずれもひたむきに取り組まれ、よりよい社会づくりに貢献されている方々でございます。

皆様方は、活動を続けられるにあたり、日々いろいろな壁が立ちほだかることもおありでしょうが、これからも末永く活動を続けていただき、わが国が誰にとりましても、より住みやすい国になりますよう、お力をお貸しくださいますようお願い申し上げます。

本日ご列席の皆様にご健勝と一層のご活躍を祈念申し上げさせていただき、私の挨拶とさせていただきます。

受賞者の皆様、本当におめでとうございました。そしてありがとうございました。

公益財団法人 社会貢献支援財団
会長 安倍 昭 恵

表彰選考委員長挨拶

内館牧子でございます。本日はこのように多くの皆様にお集まりいただき、第52回社会貢献者表彰式典を開催できますことを、心からお礼を申し上げます。

受賞者の皆様、本日は本当におめでとうございます。今回は121件の中から人命救助の功績を4件、社会貢献の功績を33件の皆様です。限られた時間の中ではございますけれども、選考経過とともに何件かの受賞者の貢献をお伝えしたいと思います。

まず人命救助につきましては、いずれも非常に緊迫した状況の中で夢中で動いていたというケースに、毎回驚かされています。

例えば今回、千葉の小川澄男さんは飲食店の店長でいらっしゃいますが、個室からお客さんの絶叫や悲鳴が聞こえた。驚いて様子を見に駆けつけますと、幼児を含む4人家族に男が包丁を振り回していた。これはメディアでも多く報道されましたので、ご記憶の方も多いと思います。小川さんは包丁をものともせず、応援のお客さんひとりとともに男を取り押さえました。6歳の女児ひとりが亡くなるというほど凄まじい現場でした。

また大阪市の長谷川雄大さんは、郵便局強盗を格闘の末に取り押さえました。自転車帰宅途中に「強盗だ！」と叫んで追いかける郵便局員の声を聞きました。そして咄嗟に反応していたそうです。犯人の持っていたナイフが長谷川さんの左わき腹に突き刺さり、7針縫う5日間の入院をされました。犯人を取り押さえることに夢中で痛みが気にならなかったと仰っています。

それから宝塚市の大岡康治さんと安宅光平さんは、出刃包丁とハンマーを手に男性を襲っている犯人を取り押さえました。また倉敷市の野村浩史さんは、西日本豪雨の際、ゴムボートに高齢者らを20人も乗せて救助いたしました。その後、野村さんは脱水と疲労でボート上で倒れ、救急搬送。数日の入院を余儀なくされたという自然との過酷な闘いでした。4件の皆様すべてが見ず知らずの方々を救助しているということに、人間というものは咄嗟に体が動いてしまうのだなということに感動させられています。

その一方で、例えば人助けのために電車が来そうな踏切に咄嗟に入るというケースもよく報じられています。それは危険なので、非常ボタンを押しなさいとされています。つまり助ける側の大切な命をも守らなければいけません。これはとても不条理なことだと思えるのですが、これまで多くの助ける側が亡くなっているということを考えますと、皆様の行動に改めて感謝を込めますと共に、ご自分の命をもお守りくださいと申し上げます。

社会貢献の功績では、障がいを持つ方のために国内外で身を粉にして働いている方が選ばれております。いま私が登壇するときにお気づきになったと思いますが、怪我で半年以上車椅子でした。治りましたものの、筋力トレーニングで1年ほど時間をかけ、プロの指導のもとでやっと戻りました。そうしましたら、今度は不整脈が出まして、命にかかわるものではなかったのですが、検査も兼ねて入院です。その間にまたも筋力が、せっかく付けた筋力が落ちてしまったのです。それで今もって階段を上る



ときは手すりとか、他人の肩を借りないと昇降ができません。この体験で実感いたしました。障がいを持つ人々や、体が自由に動かないという高齢者が、周囲にいかんが気を使って日常生活を送っているかということにです。私のように相当気の強い人間でも気を使います。それを実感しますと、周囲の方々の支援、援護というものがどれだけ有難いか身に沁みます。たとえば横浜市の「社会福祉法人訪問の家」は、重い障害のある人が社会参加できる通所施設の魁として、昭和47年にその母体があります。そこから数えて半生記近くも活動を続けていらっしゃいます。我が国最初の知的障がい児童教育や福祉施設を開いた国立市の「社会福祉法人滝乃川学園」、そしてパソコンの指導を通じて視覚障がい者の社会参加や自立を支援している福岡市の「パソボラサークル虹」もあります。

一方「とっとり・民話を語る会」のような活動を続けているところもあります。毎月2ヵ所の保育園で3、4、5歳児の前で古い民話を語る一方、高齢者や障がい者施設で民話を語っています。聞き手の年齢や環境に合わせた語り口で、釜とか蓑とか今では見ることのできない昔の生活用品をも見せたり、7名の語り部が大切な民話を語り続けています。

あらためて思うのですけれども、人命を救助することも、障がいを持つ人々を支援するというのも、その本人だけではなくて、親や家族がどれほど喜んでいられるかわかりません。特に高齢者や障がいをもつ人々を抱えている親や家族は、時に必要以上に周囲に気を使い、迷惑をかけないようにと考えるところがあります。そして気兼ねをしながら生きていくという事実があると思います。皆様方の支援やご援護はどれほどそういった親や家族に力を与え、希望を与えているかわかりません。本当に有難く思います。

また、高齢者への社会貢献ということでは、徳島県の「株式会社とくし丸」。ここは過疎化や高齢化のいわゆる「買い物難民」のために、非常にきめ細やかな移動スーパーを始めました。販売パートナーという人たちが、車で一軒一軒の家を回って、そこに住む高齢者たちの様子を見たり、話し相手になったりします。商売上の利幅はとも少なくても、買い物に出られない人たちのためになりたい、その思いに賛同し販売パートナーはすでに400人にもなっているそうです。私はこれをたまたまテレビで見たのです。そして販売パートナーという主婦が、物を売るだけではなく、見守りですとか話し相手を兼ねて、山道を行ったり来たりする姿に非常に心を打たれました。こういう取り組みは、純粋にボランティアとしては長続きしないと思います。ですから利幅は少なくても、小さなビジネスと社会貢献とを兼ねたという意味でこれは画期的な取り組みだと思ってテレビを見ておりました。

最後に毎回申し上げているのですけれども、副賞のお金は社会に還元しようなどと、義理堅いことは考えずに、どうぞ皆様個人や、一緒にやっているグループの方々のために、私的にお使いください。これは、元選考委員長だった曾野綾子さんがずっと仰っていたことです。曾野委員長は、おうちのお風呂を直すとか、中古車を買うとか、みんなで美味しいものを食べに行くとか、どうぞお好きにお使い下さいと、毎年仰っておられました。私もその通りだと思ひまして、毎回ここで申し上げております。それは決して悪い事ではなくて、皆様がそういうことで私的にお使いになることによって、再び「よし、もうちょっと頑張ろう、ボランティアをやろう」という気力が満ちてくれば、これは当財団と致しましても何よりうれしい事でございます。

本日は本当におめでとうございました。たくさんお集まりいただきましてありがとうございました。

公益財団法人 社会貢献支援財団
選考委員長 内 館 牧 子

受賞者代表挨拶

とっとり・民話を語る会の会長、小林龍雄でございます。

本日は晴れやかな会場で、社会貢献者表彰をいただき、心より御礼を申し上げます。

私たちは民話という古来よりの伝承文化を、次の時代へ継承していくべく、活動を20数年続けてまいりました。

民話は、「常民の生活」という文化を、「自然との関わり方」「人間との関わり方」「教え」を、分りやすく面白く興味を引く形で物語にしたものです。

今まで、ジャンルとしては、表彰と縁遠い地味な活動でした。

この度の社会貢献者表彰は、活動への大きな励みになると同時に、全国の民話を愛する仲間にとりましても、大変な力を得たこととなります。

しっかりと次の世代へ継承すべく、切磋琢磨してまいりますので、宜しくお願いを申し上げます。

本日は、誠にありがとうございました。

なお、貴重な時間ではありますが、せっかくの機会でございますので、「昔話」を一つ用意してまいりました。聞いていただきたいと思います。

題名は「キジとカラス」で、鳥取市の無形文化財に指定されている「佐治谷話」（さじだにばなし）七十八話の内の一つでございます。

町の人が、田舎者をだまそうとしますが、はてどうなりますやら！

語り部は、とっとり・民話を語る会会員栞田美穂子さんです。



「とっとり・民話を語る会」
会長 小林 龍 雄

キジとカラス（佐治谷話 さじだにばなし）

昔々の、或る年のこと。

寒さも、追々ときなりだした、或る日の昼下がりに、用瀬（もちがせ）の町中で往来を、佐治の男が、何やら大けな籠を大事そうに背負って。右の方には、ザル棒の先に、きれいな見事な大けな雉子を一羽ぶら下げて、得意そうに売り歩いておったそうな。

「カラスはいらんか、カラスはいらんか、大けなカラス、安うするが、いらんか」って大声で、竿の先の雉子を、ぶらりん、ぶらりん、させもって、歩いておっただって。

「おい、まあ、ありゃう見いや、在郷（さいご）の者（もん）が、阿保だけえ、大きな雉子う持とって、カラスだカラスだって間違えて売って廻りようるわいや。安うさしてみんな買あて一儲けしたらあかいや」

日頃、狡猾（こうかつ）なことで通っている町の者（もん）が、しめし合わせて、カラス売りの男をごまかして、安く売るように交渉しただって。

「うんうん、このカラスあ上物だけえ、ちったあ、はりこんで貰わにゃならんだけえど、全部買あてごっさりゃあ安うするだがなあいや」って言うと、思案したあげく、カラスにすりゃあ、べらぼうに高い値段をつけたさなあ。

町の者（もん）は吃驚したけえど、雉子だと只みたいな穴相場だわいや、阿保だけえ知っとりゃせんだし、気の変わらんまゝに、早よう買あたれいやって言うと、お急ぎで金を払ってしまっただって。

カラス売りのおやじは、銭を懐にねじ込んで、にこにこしもって、背中の籠を下ろし、中から一羽二羽三羽と数えもって約束どおり、カラスを渡したそうな。

すると、町の者（もん）は、棒の先にぶらさげとる雉子を買ったつもりだけえ、

「おい、だらずにすんないや、こりゃあ、カラスじゃあねえかいや」、

「棒の先にぶらさがとる雉子を貰わんといけんがなあ」って言うと、

「わしゃ、カラスはいらんかいなあ」って言って買あてもらっただて。

「棒の先にぶら下げとるなあ、こりゃあ雉子だぜ、雉子はこんな安い値段じゃ売らんわいや」って言うと、

当てがはずれて、がっかりしている町の者（もん）を尻目に、さっさと帰って行ったということだて。

そればっちり。



記念写真

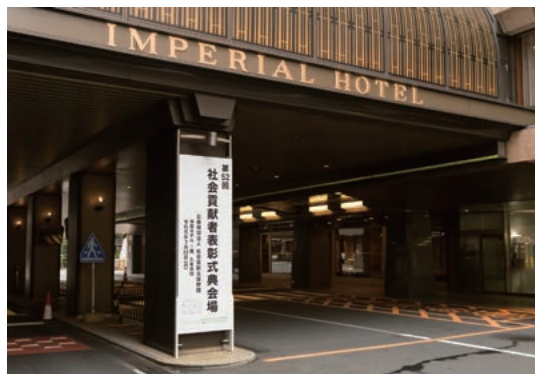


あさひ落書き消し隊
白井 勇
刈谷保健協会の雇用主会
野々山 賢一
認定NPO法人難民支援協会
石川 えり
吉成 麻子
株式会社くじ丸
荒川 伸太郎
NPO法人エンカレッジ
坂 晴紀
Hands On Tokyo
川口 基子
NPO法人
静岡市里親家庭支援センター
眞子 義秋
埼玉タイ王国友好協会
原 敏成
有限会社赤間工業
赤間 徹
小川 澄男
長谷川 雄大
大岡 康治
安宅 光平
野村 浩史

ハンダラテシユの々々を支える会
横山 紀子
社会福祉法人滝乃川学園
山田 晃二
学習サポートスコーラ
沢木 邦子
NPO法人BONDプロジェクト
橘 シュン
株式会社ハンアサキエト
秋元 義彦
国際交流Sewa
船矢 多紀子
NPO法人ハンキャンジャパン
眞島 喜幸
NPO法人まきはばリースクール
武田 和浩
社会福祉法人札幌協賛会
山下 太郎
菅野 正巳
菅野 直子
中津 賞
NPO法人宮崎野生動物研究会
岩本 俊孝

一般社団法人山形バリアフリー
観光ツアーセンター
加藤 健一
社会福祉法人訪問の家
名里 晴美
バンボラセーくる虹
藤川 敦志
小山 万里子
ポリオの会
上西 洋二
公益財団法人阪喉会
安倍 昭恵
会長
認定NPO法人リボン京都
小玉 昌代
井上 千寿代
シスター
齊藤 朋子
とつりり民話を聴く会
小林 龍雄
清水 孝夫

表彰式















来賓祝辞

本日は長年のご労苦、ご努力、ご活動が評価をされ、表彰を受けられた皆様方、そして表彰を受けられた方をサポートして下さった、多くの皆様に心から御礼と感謝を申し上げます。

毎回私はこの会に出席して考えさせられることがあります。政府や行政は、どのようにして国民生活をより安定し、質の高い社会を創っていくかが仕事です。しかし、この複雑多様な成熟した民主主義国家日本を支えるには、皆様方のご活動こそ大切です。

戦後74年です。私は6歳の時に東京で被災をしました。10万8千人の人がたった2時間半の爆撃で死亡しました。私の街は全員、墨田川へ第二次避難所として逃げるようになっておりましたが、私は水が怖かったので、町内会から外れ上野の方へ逃げ、私と母親の二人は助かりました。そういう経験も踏んできたわけですが、その後、これだけの経済成長を果たした日本は、世界の賞賛の的であることは、私は1年間のほぼ4割は世界中を旅しておりますが、どこに行っても日本の国をモデルにしたいと言われます。

私たち日本は、戦後、本当に平和な国になり、生活レベルも飛躍的に向上しました。国民の努力と共に国に対する権利の主張が強く後押ししたことも事実です。しかし権利の裏には義務があります。私たち日本人は、この義務の部分忘れて権利のみを主張をしてきましたから、日本の財政は1千百兆円という膨大な借財を抱えるに至ったわけです。

私たちは権利の主張だけではなく、国民一人ひとりができる範囲の義務を履行しなければ、これからの少子高齢化の時代を過ごすことはできません。そして皆様方こそ率先して国民の義務の分野で素晴らしい活躍をしていただいているわけです。

誰から頼まれたわけではない。自分たちの良心、そして人生って何だろう。何か世の中の役に立ちたいとの自発的な気持ちで、それぞれの地域で有意義な活動をされています。このようなことがここにお集まりの皆さんだけではなく、日本国民全てが権利と同時に義務、皆が皆を支える、そういう日本人としての伝統ある価値観を共有できれば、日本は世界からさらに尊敬される国になることは間違いありません。

ここにお集りの皆様、皆様方は決して義務を履行しようというような気持ちではな



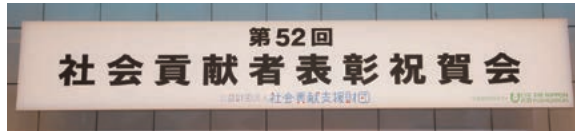
く、自然の発露でなさってこられた、本当に真に尊敬に値する皆様方です。まだまだ私たちはやらなくてはならないことが沢山あるわけで、皆様方のリーダーシップで自らのお仕事だけでなく、多くの方に呼び掛けていただき、国民の多くがこのような気持ちになって世界の模範的な平和国家日本が完成するよう、益々のご努力をお願いしたいと思います。

安倍昭恵会長を中心にして、内館牧子先生の先ほどの審査の講評もありましたが、本当に真剣な議論の中で皆様方が選ばれたわけです。どうぞ誇りを持って更により良い日本の社会を創るため、そして健全な若者がこれからの日本国を背負っていけるように、皆様方のご協力ご指導をお願い申し上げます。

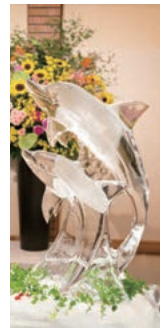
本当に本日はおめでとうございます。

公益財団法人 日本財団
会長 笹川陽平

祝賀会









社会貢献者表彰とは

国の内外を問わず、社会と人間の安寧と幸福のために貢献し、顕著な功績を挙げられながら、社会的に報われることの少なかった方々を表彰させて頂き、その功績に報い感謝することを通じてよりよい社会づくりに資することを目的とする。

第52回社会貢献者表彰の概要

【募集告知】

2018年9月より、ダイレクトメール発送、新聞への告知広告、当財団ウェブサイト等にて。

【対象となる功績】

- 社会貢献の功績

【候補者について】

- 候補者には、年齢・職業・性別・信条・国籍等の制限はない。
- 日本で活動する方、もしくは海外で活動する日本人を対象とする。
- 候補者は、同種の功績により当財団の「社会貢献者表彰」を受賞されていない方とする。
- 候補となった功績と同一または同種の功績により、既に国の栄典（叙勲、褒賞）または、大臣表彰等を受賞されている方は、選考の際、後順位とされる。
- 人命救助に関する功績については、原則として、2018年1月1日以降の功績を対象とし、この功績の場合のみ、当該行為により亡くなられた方を含む。

【選考について】

選考委員会開催日：2019年1月28日

【受賞者】

受賞者：37件（うち人命救助の功績4件）

【表彰式】

開催日：2019年7月22日 帝国ホテル東京

受賞者には表彰状、副賞として日本財団賞（賞金）を授与する。

受賞者手記目次

第52回社会貢献者表彰受賞者 37件（敬称略）

| | |
|--------------------------|-----|
| 小川 澄男 | 030 |
| 長谷川 雄大 | 032 |
| 大岡 康治 | 034 |
| 安宅 光平 | 035 |
| 野村 浩史 | 036 |
| 埼玉・タイ王国友好協会 | 038 |
| NPO 法人静岡市里親家庭支援センター | 040 |
| 特定非営利活動法人 Hands On Tokyo | 042 |
| NPO 法人エンカレッジ | 044 |
| 株式会社とくし丸 | 046 |
| 認定 NPO 法人難民支援協会 | 048 |
| 吉成 麻子 | 050 |
| 刈谷保護区協力雇用主会 | 052 |
| 公益財団法人阪喉会 | 054 |
| ポリオの会 | 056 |
| あさお落書き消し隊 | 058 |
| バングラデシュの人々を支える会 | 060 |
| 社会福祉法人訪問の家 | 062 |
| 社会福祉法人滝乃川学園 | 064 |
| 学習サポート・スコラ | 066 |
| 特定非営利活動法人 BOND プロジェクト | 068 |
| 株式会社パン・アキモト | 070 |
| 国際交流 Seya | 072 |
| 認定特定非営利活動法人リボン・京都 | 074 |

| | |
|-------------------------------|-----|
| パソボラサーくる虹 | 076 |
| シスター 井上 千寿代 | 078 |
| 瀧谷 昇 | 080 |
| 齊藤 朋子 | 082 |
| 有限会社赤間工業 | 084 |
| 特定非営利活動法人宮崎野生動物研究会 | 086 |
| 中津 賞 | 088 |
| 菅野 正巳 菅野 直子 | 090 |
| 社会福祉法人札幌報恩会 | 092 |
| 特定非営利活動法人まきばフリースクール | 094 |
| 特定非営利活動法人パンキャンジャパン | 096 |
| 清水 孝夫 | 098 |
| とっとり・民話を語る会 | 100 |
| 一般社団法人山形バリアフリー観光ツアーセンター | 102 |



対象となる功績内容

- ▶ 海難、水難、交通事故、遭難等に際し、身命の危険を冒して救助、救援に尽くされた功績
- ▶ 犯罪等の発生に際し、身命の危険を冒してその解決に協力された功績
- ▶ 災害、事故、犯罪の発生を未然に防いだ功績
- ▶ 精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶ 困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- ▶ 先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- ▶ 海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績

小川 澄男



千葉県

2018年5月13日午後7時頃、店長として務めていた千葉市稲毛区の飲食店で、客として来店していた男とその男の実妹家族4名（女兒6歳と1歳含む夫婦）が飲食中の個室から、突然大声や悲鳴が聞こえたため様子を見に行ったところ、男が包丁を妹にむかって振りかざしていた。小川さんは、咄嗟にその男を後ろから取り押さえて、包丁を持っている右手首をつかみ、押さえつけながら応援を呼んだ。

客として来店していた男性のひとりが、小川さんに加勢して男を押さえつけた。男は執拗に包丁を放そうとせず、押さえつけられながらも被害者を足蹴りし、小川さんと男性は抵抗を続ける男を自らの危険を顧みず取り押さえて制圧し逮捕した。

実妹と1歳の女兒も傷を負い、夫は重傷、残念ながら6歳の女兒は亡くなった。小川さんたちが取り押さえなければ、家族全員が殺害されていた可能性が高く、更なる被害を未然に防止した。

（推薦者：公益財団法人警察協会）

仕事中「ガタガタ」「キャー」と女性の悲鳴！ 少し前に「とりのから揚げ」を運んだ個室の方から聞こえました。男性2人、女性1人、お子様1人、赤ちゃん1人のご予約のお客様の個室でした。何かのトラブルで喧嘩が始まったと思い、部屋に近づいていくと男性の怒鳴り声もなく、ただ「ガタン、ゴトン」の音でした。引き戸を開けると包丁を右手で高くかざし、女性を目掛けて刺そうとする光景でした。「咄嗟」と言うか瞬間的に助けなければと思い、私は左手で犯人の左脇と首を押さえ右手で犯人の包丁を握った犯人の右手首を同時に強く握り締めていました。犯人の力は想像を超えた強さで、気づいた時に「やっちゃった」と思いました。日頃妻から「危ないことはしないで」と言われていたからです。

冷静な気持ちで「誰か来てくれ」と応援を呼びました。幸いにして1人の男性が駆けつけてくれました。「包丁を取って下さい」と男性に頼み、その男性が包丁を握る犯人の指を1本1本外しにかかりましたが、犯人の異常に強い力にびくともしませんでした。2人で犯人を押さえ、3人目のお客様がやっと包丁を犯人の手から外すことに成功しました。今あるのは駆けつけてくれた男性のおかげです。

その後も暴れる犯人の手首を握ったまま、男性と一緒に押さえつけ警察の到着を待ちました。そんな中、女性（お母さん）の「あさみ（仮名）何処にいるの？」と泣き叫ぶ声が部屋の中で響いていました。あさみちゃんは犯人の下敷きになっており、刺された男性（お父さん）は太腿から大量出血で顔は青ざめていました。その後、部屋の外にお父さん、お母さん、あさみちゃん、赤ちゃんを避難させました。

犯人を取り押さえしている中「あさみ！ いやだ！ あさみ！」という母親の叫び声と「頑張って！ 頑張って！」と父親を励ます女性従業員の声が繰り返されておりま



した。

犯人逮捕後、警察署で事情聴取を受け、終了後「あさみちゃんが病院で亡くなった」と聞きました。残念ながら一人の命を救うことが出来ませんでした。私は今でも忘れません！ あさみちゃんの亡くなる寸前の顔とお母さんの叫び声と赤ちゃんの血を浴びた赤い顔と血の海になった掘りこたつの床。

人は予想、予測をしない中で、命を亡くしてしまうこの時代だからこそ、人の命を救ってあげなければならないと思います。それは「正義」であるからです。

最後になって申しわけございませんが、素晴らしい2日間をプレゼントして下さいました社会貢献支援財団の関係者の皆様、私を推薦して下さいました公益財団法人警察協会様、式典の誘導をして下さったスタッフの皆様、誠に有り難うございました。

又、式典の際に深く感じたことは社会貢献で受賞なされた方々の世界的で幅広く、奥の深い活動と素晴らしい人柄でした。

色々と有り難うございました。



▲職場「まる波」にて



▲千葉西警察署にて表彰式

長谷川 雄大



大阪府

2018年6月4日の午後17時17分頃、仕事を終えて自転車で帰宅中、道路の反対側を男性3人が走ってくるのを目撃した。後ろを追いかける郵便局員の2人の男性が“待て、強盗”と叫ぶのを聞いた長谷川さんは自転車のまま道路を渡り、逃げる犯人と追いかける2人の間に入り追跡、犯人の右側から左手で首に手を回し、そのまま倒れこみ犯人を取り押さえた。その際、犯人が持っていたナイフが長谷川さんの左わき腹に刺さり、7針を縫う怪我を負い、5日間の入院となった。

自身が負傷したことを知ったのは、痛みを感じて腹部を見たら、洋服が血で染まっていたからで、ナイフが刺さった直後は犯人を取り押さえる事に夢中で気が付かなかったという。

(推薦者：公益財団法人警察協会)

この度は社会貢献者表彰式典に参加させていただきありがとうございました。

受賞の経緯としましては2018年6月4日、仕事が終わるいつも通り自転車で帰る途中、車道を挟んだ歩道を全速力で走っている男性が目につきました。

気になって付けていたイヤホンを外し見てみると、後の方から「待て！強盗！」と言いながら走っている方が見えたので「捕まえないと！」と思い、車道を渡り、後ろから追いかけ、捕まえようとした時に勢いが強くて相手が転がったので逃げられないように押さえました。

その際、腹部にナイフが少し刺さりましたが周りにいた方々が警察や救急車に連絡をしてくださいました。

7針縫う怪我をしましたが近くには公園もあるので子どもが怪我をする可能性を無くせたのでよかったと思っています。



▲事件発生の郵便局



▲犯人の逃走経路



▲逃走犯を見つけ追尾した交差点



▲犯人と揉み合い、被害者と協力して犯人を確保した現場

大岡 康治／安宅 光平



兵庫県

2018年1月5日午前10時35分頃、兵庫県宝塚市の住宅街で「殺してやる」などと奇声をあげながら出刃包丁とハンマーを手に持った男が男性を襲っているところに遭遇した。

大岡さんは、自宅で騒ぎを聞きつけ駆けつけた安宅さんとともに、自らの危険を顧みず、出刃包丁とハンマーを男から取り上げ、押さえつけて制圧し、警察官に引き渡した。

襲われた男性は頭部や左頸部などに9カ所に及ぶ傷害を負わされていた。後の取り調べで、男は「コンピュータから、近くの住民をすべて殺せとの指令が来た」などと意味不明の供述をしており、大岡さん、安宅さんが男を取り押さえなければ大惨事が起きていた可能性があった。

(推薦者：公益財団法人警察協会)

大岡 康治

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団の人命救助の功績の決定及び、表彰式典に御招待いただき誠にありがとうございました。

今回の表彰式に参加させていただき感じたことは、受賞者の方々の社会貢献活動の功績内容が行動力、実践力にあふれ、その凄さに驚くとともに感服するものばかりでした。そのような方々と肩を並べて受賞できたことに感謝しています。心よりお礼申し上げます。

受賞の事案は、昨年1月5日午前10時半頃、自宅前の道路で発生しました。大きな怒鳴り声が聞こえ、何事かと家を出たところ、被害者と犯人が組み合っているところでした。被害者はすでに数箇所包丁による傷を負っている状態でした。このまま警察が来るのを待つか助けに行くか迷っていたところ、近所の安宅君と目が合った瞬間、二人とも被害者を助ける行動をとっていました。このような状況に直面すると身体がすくむものと思っていました。助けなければと思う一心での行動であったと思います。自分自身でも今振り返ると不思議な感じです。犯人を取り押さえってから、警察が来るまで4分～5分位の時間がとても長く感じられました。犯人は無事、警察に引き渡され、後日、被害者の方も命に別状は無いことを聞き、大きな事態にならずに済んだことを良かったと思っています。

最後になりますが、式典に参加して様々な貢献活動を肌で感じたことを活かし、今後も社会に貢献できる活動が出来ればと思っています。

安宅 光平

まず何より、今回表彰していただいたのは私にとって身に余る光栄でした。安倍会長をはじめ、選考委員の方々や兵庫県警察の方々など今回、私の選考に関わってくだ



さった多くの方に深く感謝申し上げます。

事件が起きたのは、私が高校2年の時の正月でした。両親が外出している時にヤクルトさんが配達にきたので、私が外に出て対応していました。その時、家の通りの下の方で男性の怒声が聞こえ、はじめは特に気にかけていませんでしたが、その声がしばらく続いていたので何事だろうと思い声のする方へ走って行きました。すると、二人の男性が重なって地面でもみ合いになっている光景が目に飛び込んできました。被害者の方が半分上に乗り、「誰か助けてください」と叫んでいました。助けに行こうかと思いましたが、加害者は手に包丁と金槌を持っており、少しためらいました。しかし、ご近所さんの大岡さんと目が合い、次の瞬間には二人で足を踏み出していました。犯人の手から血のついた包丁と金槌を奪い、被害者の方と大岡さんと私の三人で犯人を押さえつけ、警察を待ちました。

被害者の男性は頭部などを切られており、出血していました。そのため、途中何度か男性の意識が薄れることもあり、そのたびに「頑張ってください」と声かけをしながら取り押さえていました。あの時ほど警察の到着に安心したことはなかったと思います。

人は「自分が動かなければ」というとき、本当に何も考えずに勝手に体が動くのだと実感しました。切りつけられる危険や「犯人を取り押さえられたら自分はヒーローだ」というような利己的な考えはまったく頭になく、無意識に行動していました。ただただ必死だったことだけ記憶しています。

今回、受賞式に参加しようと思った理由の一つは、自分より大人の方に「若者もやるときはやるのだ」ということを知ってほしかったからです。「最近の若者は助け合いの精神もないし、周りに関心を持たない」といったような言葉をよく耳にしますが、そう思っている大人に私は「助けを求めれば若者も手を差し伸べてくれるから、困ったときは私たち若者に助けを求めてほしい」と伝えたいです。

今回は、本当に素晴らしい経験ができました。ありがとうございました。



▲傷害事件のあった現場



▲揉み合い、二人の後方の突き当りの道まで行き、犯人を確保した

野村 浩史



岡山県

西日本で猛烈な雨が降り続いていた2018年7月6日、岡山県倉敷市真備町の自宅で野村さんは両親と過ごしていたが、車が浸水するかもしれないと思い、午後10時過ぎに車を高台に移動させた。雨が小康状態になるのを車中で待っていたが、雨の勢いは止まらず、両親が気になり車を残して自宅へ戻る途中、川の決壊で冠水し、水位は胸のあたりまで上がってきた。「これはまずい」と思った時、車の中に釣り用のゴムボートがあるのを思い出し、ガソリンスタンドで道具を借りボートに空気を入れると朝7時になっていた。

両親は市のボートで救助されたことを知り安堵したが、ボートを漕ぎだすと、水没した屋根の上で助けを求める人や水に飲み込まれそうな高齢者が見えた。水面を流れる瓦礫でボートが破れないよう慎重に進み、高齢者から順番に定員3人のボートに乗せ、2人ずつ土手まで運び、住宅と土手の間を十往復し約20人を助け出したが、野村さんは疲労と脱水症状でボートの上で倒れ、流されているところを友人に発見され、救急搬送された。

野村さんが数日で退院すると野村さんに救助された近所の人たちがお礼に訪れた。

『西日本豪雨を経験して失ったもの、そして…得たもの』

この度、社会貢献者表彰式典におきまして荣誉ある賞を賜り心からお礼申し上げます。

2019年7月21日、22日は今まで生きてきた人生、そしてこれから生きていく人生の中でも本当に忘れられない日となりました。受賞された方々とも楽しく交流させていただく事ができ、本当に有意義で最高の時間を過ごさせていただきました。安倍会長をはじめ社会貢献支援財団の皆様、本当にありがとうございました。

私はタイトルに書かせて頂いた通り2019年7月7日、西日本豪雨により被災しました。

西日本豪雨前日の夜

豪雨が降り続く6日の夜、ただの直感でしかありませんが嫌な予感がした為、高台へ車を移動させ避難していました。

父の避難

数時間経過した頃、母から「父ちゃんは車が2台とも浸かったらダメだから一か八か車を高台へ移動させに行った」と連絡が入りました。もし、途中で車が止まっていたらと心配になり歩いて家の方に向かってしていると高台への道は避難している車で大渋滞でした。その渋滞の中、なんとか父を見つける事ができ私は一安心しました。そしてそのまま家の方へ2kmほど歩いていくと想像を絶する光景が目に見え込んできました。そこには数時間前、高台へ上がる際に通った道は無く、見えるのは水だけでした。

我慢の数時間

すぐにでも母を助けに行かないと、と思い、自宅に向かいましたが辿り着く事すらできず、自宅に着く遥か手前で水位は既に私の身長を超えていました。真っ暗でなにも見えない、今動いても無駄だ、はやる気持ちを抑え一旦高台へ戻りとにかく助ける方法だけを考えました。

ゴムボート

私は自分の車に積んであるいつも釣りで使っているゴムボートの存在を思い出しました。「もう、行くしかない」夜明けと同時に救出へ向かう為、準備を開始しました。しかし、ここでアクシデント発生、ゴムボートを膨らます空気入れが見当たりません。丁度そこへ友人が駆けつけてくれ被害に遭っていないガソリンスタンドへすぐに車を

走らせ、なんとか膨らます事ができ、土手の上からゴムボートを浮かべました。

未知の世界

いつも上を見上げて見ている場所を今、自分がゴムボートを漕いでいます。目の前には電線、瓦礫やガスボンベがそこら中に浮いています。正直、ほんとうに怖くて仕方ありませんでした。しかし、気づいたらボートを漕ぎ続けている自分がいました。母を救出するため。その思いがそうさせたのだと思います。

電話

どうにか自宅までたどり着いた私は大声で母を呼びました。しかし応答がない上に家の窓も全て閉まっていた。もしかしたら家の中で…。窓ガラスを割ろうと思った瞬間、父から電話が鳴り「母ちゃんはレスキュー隊の方に救出してもらったから大丈夫！」その言葉を聞いて力が抜け、今自分が置かれている状況を冷静に考える事ができて余計に怖くなりました。

助けを待つ人達

母の無事も確認でき土手へ帰ろうと思いを上げた瞬間、そこには逃げ遅れたたくさんの人達がタオルを振ったり、大声を出したりして助けを待っていました。私はその光景を目の当たりにし、そのまま土手へ戻る事はできませんでした。

救助活動

私はそこから救助活動と呼べるかはわかりませんが、ゴムボートの定員数と機動力の事も考え、2人ずつ乗せて土手との往復を繰り返しました。

11回目の救出

11回目の救出に向かった直後、体に異変を感じました。手足が痺れ、上手く漕ぐ事ができません。更にその痺れは体全身へと広がり、最後は上手く喋れなくなっていました。前日からほとんど水分も取れていない状態、更に暑さと湿気で脱水症状を起こしてしまったようでした。その時は既に記憶はなく、はっきり記憶があるのは病院に搬送された時でした。ゴムボートの上で倒れた私はたまたまいい方向に流され、屋根の上に避難していた近所の後輩のところへ流れついて助けられました。私は一番やってはいけない二次災害を引き起こしてしまい、たくさんの人に迷惑をかけてしまったと反省しています。

仲間

私は4日間入院し退院後、その足で自宅に向かいました。そこで目にしたのは仲間の姿でした。私が入院している時からあの暑い中、何十人も仲間が家の片付けが全て終わるまで毎日駆けつけてくれました。本当に「ありがとう」の言葉しか出てきませんでした。

最後に

私は、タイトルに書かせていただいた通り、西日本豪雨により家屋や家財などお金で買える全てものは失いました。でも、この災害を通じて何かお金では買えないものを手に入れられたように思います。本当の仲間とは何か。もちろん楽しい時にワイワイ集まってくれるのも仲間です。でも辛い時、苦しい時、困った時にそっと手を差し伸べてくれ、集まってくれる仲間。そんな本当の仲間がたくさん居てくれて私は幸せ者です。



埼玉・タイ王国友好協会



会 長
原 敏成

埼玉県

埼玉・タイ王国友好協会は、埼玉県の国際化の進展とタイ王国との更なる友好関係の維持確立を図り、民間レベルでの「草の根外交」を推進するために、前埼玉県知事故土屋義彦氏の全面的な支援のもと、1999年3月16日に設立された。以後、上田埼玉県知事、埼玉県、埼玉県国際交流協会及び多くの会員の支援・協力のもと、教育支援・友好事業への協力など、有益な事業を推進している。

特に支援の届きにくいタイ王国北部の山岳地域を中心に活動を始めて設立20周年を迎えた。会員数は276名で、法人会員と個人会員の会費で成り立っている。2005年から北部山岳地域に教育施設を建設し、校舎やオープンスタイルの教室、図書館、食堂、寄宿舎など9棟を寄贈した。

また、新たな取り組みとして2016年より、人材育成支援のために奨学支援も行っている。これは、ソフト面での支援として、寄贈した教育施設の卒業生で北部山岳地域の教育関係の仕事我希望する高校生と大学生を対象に学費と生活費の一部を助成するもので、現在10名の学生を支援している。さらに2017年からは、インフラ整備事業にも力をいれ、日タイ修好130周年記念事業として電気の無い村の通学路への太陽電池式街灯の設置を行ったほか、協会設立20周年記念事業として北部山岳地域での水道新設事業を新たに開始した。

国内での交流会やイベントにも積極的に参加し、国内外での友好と交流を深めて支援を続けている。

(推薦者：埼玉県県民生活部国際課)

この度は栄えある社会貢献者表彰を賜り、誠にありがとうございました。

当協会は、埼玉県とタイ王国の友好関係の進展を図ることを目的として1999年3月16日に設立され、おかげさまで今年の3月で20周年を迎えました。この節目の年に社会貢献者表彰をいただきましたこと、大変光栄に思っております。ご推薦とご選考をいただきました方々をはじめ、当協会を支えていただいている皆様に改めて感謝の意を表します。

当協会はこれまで、友好親善事業への協力や人材育成支援など、民間ベースでの「草の根外交」に取り組んでまいりました。近年の活動としましては、2018年度に日タイ修好130周年記念事業を実施し、2019年度には協会設立20周年記念事業を実施しました。

具体的に、日タイ修好130周年記念事業では、①タイ北部ランブーン県のポメロップ幼少中校への食堂建設・寄贈、②電力インフラが未達である同県ホワイホーム村の通学路への太陽電池式街灯の設置、③ランブーン県の山岳民族職業訓練センターへの図書寄贈といった3つの支援を実施しました。また、ポメロップ幼少中校の食堂の完成に合わせ、2018年2月に、会員の皆様と共にタイ王国へ親善訪問を行いました。食堂引渡式へ参加したほか、継続事業である人材育成支援の次期候補者との面談などを行いました。親善訪問では現地の皆さんと直接触れ合い、たくさんの笑顔や感謝の言葉をいただくことができ、今後の活動の励みとなる大変貴重な思い出となりました。



協会設立20周年記念事業では、ランプーン県ホワイ・ヒヤ村での水道新設事業を実施しました。電気が無く、水道設備も不十分なこの村では、生活用水の確保が困難な状況となっていました。2018年2月の親善訪問の際、村長から設備改善の強い要請を受けた当協会は、総会での承認を経て、協会設立20周年記念事業として水道新設事業を開始しました。2018年9月に調印式を執り行い、一時は雨期で工事が難航しましたが、2019年3月には水道設備が無事完成しました。生活用水が安定供給されると共に、衛生面も改善され、村の皆さんには大変感謝されていると現地からご報告いただいております。その他、協会設立20周年の記念品として、現地中学生による手縫いのコースターの製作に取り組みました。コースター製作をきっかけに、このような1村1品運動がタイ北部地域にて広がることを願っております。

この度の受賞を機に、当協会ではさらに草の根外交に力を尽くす所存でございます。現地でのニーズを調査しながら、当協会としてどのような支援ができるか検討し、実行してまいりたいと考えております。

会長 原 敏成



▲村長との意見交換



▲完成した食堂の引渡式



▲完成した校舎の引渡式



▲北部山岳地域の子供たち



▲完成した太陽電池式街灯

NPO 法人静岡市里親家庭支援センター



理事長
眞子 義秋

静岡県

2005年に静岡市の政令指定都市移行とともに、静岡県中部地区里親会から「静岡市里親会」として独立。その後、国の制度改正により里親支援事業が社会福祉法人やNPO法人に委託可能となったため、2010年にNPO法人として承認を受け、元児童相談所長の眞子義秋氏が理事長に就任。以来、市の児童相談所と連携して里親制度普及促進事業と里親委託推進・支援事業を行っている。市の児童相談所は虐待対応等に追われ、里親支援には限界がある。子どもたちのことを考えればこのような支援は必須。

同センターは「啓発」「研修」「相談・支援」の3本柱を軸に活動を行っている。「啓発」では、里親一日体験や、記念講演会、里親体験談の発表、里親相談会の開催、メディアやHPによる発信がある。「研修」では、里親への研修会、未委託里親へのフォローアップ研修、スキルアップ研修などを行っている。「相談・支援」では、児童相談所が行う里親認定や里親子のマッチングの補助、元里子の自立支援などを行っている。里親の養育上の悩みや問題点については同じ里親同士の支援が有効で、里親同士が知り合い繋がることができ、未委託の里親と委託された里親間の交流にも役立つ「里親サロン」も開催している。また、里親への基礎的な養育研修や、多岐にわたるテーマ別研修（発達期に沿った愛着の修復、あそびの力で楽しい子育て、障害と自立支援、子どもの権利など）を年10回行い、里親が悩み、孤立してしまわない体制づくりと里親の資質向上に取り組んでいる。

この度、公益財団法人社会貢献支援財団から社会貢献者としてNPO法人静岡市里親家庭支援センターが受賞の榮譽に預かり、厚く御礼申し上げます。

式典では、全国から37団体の方が受賞され、素晴らしい活動内容を聞き感動しました。中でも、人命救助で自らの危険を顧みず救助した方、難民の人々を支援した方や動物愛護の活動を支援した方の社会貢献された話に大変感動しました。

私たちの活動歴はまだ10年程度ですが、式典閉会時に公益財団法人日本財団の笹川様のお話を聞き「民間でやれることは民間でやる」が一番大切だとのことのお言葉をいただき深く感銘いたしました。正に当センターの指針として活動してまいりたいと思います。

当センターは、児童虐待の対応に忙しい児童相談所に代わって里親による里親支援を行う民間団体として、平成22年10月に静岡市里親会によって設立された里親支援機関です。平成23年4月に静岡市里親支援業務を委託されてからこの間、「啓発」、「研修」、「相談・支援」を活動の3本柱に里親支援を実施してきた結果、里親委託率に代表されるように里親支援機関として全国でトップクラスの活動をするまでになりました。その要因としては、里親支援の専門機関であること、児童相談所や里親会と緊密な連携を図っていること、里親リクルートから里親認定事務補助、マッチング、研修、委託後の相談支援、委託解除後の支援に至るまでの事業を一貫して行っていることのほ



か、里親が孤立しないように、里親サロン、ベテラン里親が行う里親相談員活動や里親会の親睦行事を通じて、活発な里親同士の交流・支援が行われていることが挙げられます。

当センターが受賞できたのは、日本の社会的養護のうち里親支援について、これまで公的機関が担ってきた中で、民間団体が大きく貢献していることを高く評価されたものと考えています。

現在、子どもたちの状況は虐待の増加、ネグレクトの親の増加とともに、親と暮らせない子どもが増え続けています。

今回の受賞を大きな励みとして、さらなる家庭養護の推進のため、児童相談所、里親会をはじめ、多くの関係団体とも連携し、一層尽力していく所存です。

今後とも、ご支援、ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

理事長 眞子 義秋



▲自立支援事業費授与式



▲視察対応



▲乳児院懇談会参加



▲官民協議会研修参加



▲里親と親睦会

特定非営利活動法人 Hands On Tokyo



事務局長
川口 基子

東京都

家族の転勤により来日したディーバ・ハーシュさんが、友人と共に日本語と英語の2か国語でボランティアができる組織として、2006年に創設し、2009年にNPO法人として認証を受け、2017年に認定を受けた。

ハーシュさんは以前所属していたボランティア団体が採用していた、多額のお金や長時間拘束という負担を伴わず、仕事に影響を及ぼさない無理のない範囲でボランティアが出来るシステムを踏襲し、地域のNPOや児童養護施設、老人ホーム、障害者を受け入れている団体とパートナーシップを結び、それぞれのニーズにあった活動を提供し、アクティビティの支援を行っている。2011年からは東北の被災地支援も行っており、去年は、熊本の震災被災地支援も開始した。

また10代の若者のボランティアへの参加と意識を高めるための活動にも力を入れている。日本では、子どもたちが小さいころからボランティアに参加する機会が少ないため、去年からは「ユースインパクト」という部門をつくり、インターナショナルスクールの子どもたちを中心に、ボランティア活動の輪を広げ、現在は、東京圏の高校や大学に所属する学生リーダーたちが主導して、ボランティア活動を企画・実行している。若い世代のこうした活動経験によって、各地域の有能なリーダーが育っていく基盤になるのではないかと考えている。

この度、ハンズオン東京が社会貢献支援財団に表彰していただいたことを大変光栄に思います。弊会はボランティア活動を通じて微力ながら社会に貢献させていただいておりますが、今回一緒に受賞された方々にお目にかかり、そのご受賞理由を伺って、なんと沢山の個人、団体の皆さまがさまざまな形で社会に貢献していらっしゃるのを知り感激いたしました。そして受賞者のお仲間になれたことを大変嬉しく思います。ハンズオン東京の活動に賛同し、支援して下さった皆さま、ハンズオン東京のために多くの時間と労力を費やして下さったボランティアの皆さま、理事会とアドバイザーの皆さま、そしてスタッフを誇りに思い、心から感謝申し上げます。

ハンズオン東京は、コミュニティのニーズに合った有意義なボランティア活動の場を2か国語で提供することにより、社会へ貢献し、ボランティアリズムを浸透させ、リーダーたちを育成することをミッションとしております。国際交流から生まれたボランティア団体である弊会は、2006年にアメリカ出身の創始者と有志の皆さまが活動を始めてから少しずつ輪が広がっていきました。日本語と英語でボランティア活動ができる団体として、さまざまな国の出身の方が参加をして下さっております。活動を始めてから4年目の2009年には特定非営利活動法人となり、2017年には東京都より認定を取得しました。14年目となる今年、年初に掲げた目標は、「原点に戻り活動内容をより充実させる」といたしました。

活動の場は、乳児院・児童養護施設、災害復興支援、そしてスペシャルニーズ（障



がい者支援団体、特別支援学校、特別養護老人ホームなど)です。同じ活動に毎回参加して下さるボランティアの方も多くいらっしゃることはとてもありがたく、受益者の方々にもお顔見知りの方がいらっしゃる喜んでいただいております。若い世代のボランティアリズムやリーダーシップの育成を目的としたプログラムでは、高校生や大学生が中心になって企画・運営をしています。設立当初から続く定例のプログラムでは、認定NPO法人スペシャルオリンピックス日本・東京、東京都済生会中央病院附属乳児院、社会福祉法人愛隣会など、長年パートナーとして手を携えて活動させていただいていることも誇らしく、今回の受賞もパートナー団体の皆さまのお蔭でもあると感謝しております。今後も有意義なボランティア活動を提供できますよう努力を続けて参ります。

事務局長 川口 基子



▲デイ・オブ・サービス (ボランティア、スポンサー企業、パートナー団体の方たちが交流をしながらボランティア活動をするイベントデー)



▲東北復興支援プロジェクト (東北被災地の農園や仮設住宅、コミュニティーセンターを訪問するなど、復興支援のお手伝いをするプロジェクト)



▲LIVES プロジェクト (障がい、国籍、性別などを越え、共にもっと関わっていきける社会をつくることを目指すプロジェクト)



▲Youth Impact プロジェクト (若い世代がリーダーシップやボランティアリズムを学ぶためのプロジェクト)



▲乳児院飾り付けプロジェクト (乳児院の子どもたちのお誕生会の飾りを作るプロジェクト)



▲特別養護老人ホームプロジェクト (特別養護老人ホームを訪問し、音楽療法やタッチ療法を取り入れ、交流をするプロジェクト)

NPO 法人エンカレッジ



理事長
坂 晴紀

沖縄県

沖縄で塾を経営している坂晴紀さんが、通いたくても経済的に通塾を諦めてしまう子どもたちが多い現状を目の当たりにし、全ての子どもたちが夢や希望を持てるよう、均等に学習機会を与えたいとの思いで、就学援助児童への学習支援を行う「NPO 法人エンカレッジ」を2008年に設立した。「頑張る意欲がある子どものためのセーフティネット」として取り組んでいる。現在は県下に24カ所の教室を構え、200名のスタッフと900人以上の生徒が通い、着実な広がりを見せている。

ここに通う子どもたちは、市町村の福祉窓口から紹介されたり、広告を見て応募してくる。学習指導以外にも、進路指導、勉強することによっていかに自分の未来や可能性が広がるかを伝え、高校への進学を促すほか、高校進学後も居場所を提供していて、面接の練習や履歴書の書き方など生活指導も行っている。

通ってくる子どもたちには未来の可能性を伝えたり、話をよく聞いて導いていくと劇的な変化を見せ、伸びしろがともあると坂さんは感じている。安心できる居場所を提供し、褒め、知的欲求を満たし、達成感を感じることで、子どもの能力は無限に伸びていく。教育格差によって生じる負の連鎖を断ち切り、沖縄の出生率の高さをもって、社会で活躍できる子どもを育てるのは、まさに少子化の日本の現状を、将来支える仕掛けになるのではないかと期待される活動。

私は20年前から沖縄県沖縄市を中心に学習塾を経営しております。運営する中で、子どもの学習環境を整えたくとも経済的に立ちいかない保護者、そして通塾を諦めてしまう子どもを見てきました。子どもたちの可能性をより伸ばす環境を整えたいとの思いからスタートしました。

塾経営でしたが、私がサポートできるのは一握りでした。そしてよくよく調べていくと、沖縄の貧困率の高さの背景には、前の世代からの貧困の連鎖を断ち切れていない世帯が多数あるということ。経済的要因から学習や職業選択の自由が利かず、夢や希望を諦めるしかなかった例が少ない。この状況をなんとかしたい一心で、有志とともに法人を立ち上げ、就学援助児童を対象に通塾支援から活動を開始しました。現在では沖縄県や市町村より受託し、県内21箇所です居場所型学習支援教室を運営しております。

当初は、塾など学外の学習環境で勉強をしっかりわかりたい、という子どもたちがほとんどでした。しかし活動の幅が地域・層ともに広がる中で、教育以前の問題を抱える生徒が少ないことがわかってきました。中でもとりわけ感じたのは自己肯定感が低く、学習以前の、ゼロやマイナスの問題を抱える子どもたちの多さです。近年は特に、発達障害を抱えるケースの相談も増えてきました。

どんな子どもたちも、自分の可能性を拓くことができるようにするために。私たち大人は子どもたちが社会に対して夢や希望を持てる環境を整えていかねばなりません



ん。そのためには、教育という一つの側面だけでなく、福祉や社会との多角的なサポートが必要ではないでしょうか。また、多様化する子どもたちの社会での受け皿と、机上の学習以外の評価基準が必要であると考えております。多様な機関と連携を図りながら、子どもたちを共に育てていく仕組みを早急に整えていきたい。

年々その必要性をより感じる中で、今回の社会貢献者表彰を受賞し、背中を暖かく押された気持ちになりました。受賞後間もないですが、社会に対して、必要性をより訴えやすくなったと感じております。

また、今回の受賞は、これまで当法人の活動にお力添えくださった行政や企業、サポーターの皆様と、そして何より、夢や目標に向かって学習に励んだ子どもたちのお陰だと感じております。子どもたちが成功体験を得た時に見せる笑顔や成長が、私たちの活動の何よりの原動力となっています。そして一緒に見守ってくれるサポーターの皆様のお陰で、子どもたちが学ぶ環境を整えることができます。改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

最後に、素晴らしい方々と一緒に受賞できたことをとても光榮に思います。子どもの貧困というワードをなくし、皆が夢や希望を失うことのない社会を目指し、これからも活動を続けてまいります。

理事長 坂 晴紀



▲授業の様子



▲文化祭2018



▲豊授業



▲北谷工作

株式会社とくし丸



代表取締役
住友 達也

徳島県

地域の過疎化や核家族化などによる買い物難民は全国に825万人いると推計され（2018年農林水産省調査）大きな社会問題となっている。徳島県下に住む母親から買い物に苦勞している話を聞いた(株)とくし丸の代表取締役を務める住友達也さんは、①買い物困難者の支援 ②地域スーパーの売上支援 ③雇用の創出を目的とした移動スーパーのモデルをつくり、2012年に営業を開始した。

移動スーパーという形は行商から始まり昔からその手法はあったが、品揃え、売れ残りや近隣小売店舗との問題が壁となって長続きしない状況が続いていた。ところが、住友さんが考えたとくし丸の方式は、販売パートナーにはそれぞれ個人事業主となってもらい、調達・販売・ルート等のノウハウを伝え、実際にスタートしてからも研修を行う。また相談窓口を設け、孤立させないように全体会議なども開催する。販売パートナーはとくし丸が契約した地元のスーパーの商品を持ち出し、売れ残ったら返品できるいわば販売代行で、提携スーパーが取り扱う生鮮食品や生活雑貨等の移動販売を行う。400品目1,200点の商品を冷蔵機能を備えた軽車両に積んで各エリアを巡回し商品を販売している。

車で一軒一軒の家を回る商売は、時代の流れに相反するようにみえるが、「周回遅れのトップランナー」になれる可能性を秘めているという。利幅が少なくても、買いに来る人から“ありがとう”と声をかけられる充実感と満足感は何事にも代えがたいものがあるそうだ。現在、とくし丸の販売パートナーは400台に届き、日販平均（今年3月）は89,000円を超え、社会貢献性も高く持続可能な収益を得ながら地域で働くことができる仕事として注目されている。

この度はありがとうございます。

今回受賞された皆さまには、様々なアイデアと工夫で社会問題を解決されていると感じました。個人で人命救助を行われた方々には、おそらく自然発生的であろう、各人の多大な勇気に敬意を抱きます。

我々、株式会社とくし丸は、全国で移動スーパーをやっている企業です。“やっている”と言っても、とくし丸本部と地域のスーパーが契約し、その地域スーパーと販売パートナーと呼ばれる個人事業主が契約し、販売パートナーが自ら購入した特殊仕様の軽トラックに乗って販売を行っています。

とくし丸は、“買い物難民”のサポートをミッションとして存在しています。日々の買い物をサポートするため週2回、希望された高齢者のお宅に一軒一軒訪問することで、結果として自然に高齢者の見守り活動を行うことができます。高齢者には、見守ろうとして接すると煙たがられることが多々あります。週2回の食品の販売という、必然的の行為があるからこそ、我々の見守り活動が存在しています。これまで全国では複数件、訪問したらお亡くなりになられていた、という事例もありますが、その何倍も未然に体調不良を察知し、救急車を呼んだり、地域包括支援センターと連携し

たりして命を救った例もあります。また毎回のよう、販売に行っている我々が「ありがとう」と言われる、馴染んだ1対1の関係性の中に、思いやりが生じています。

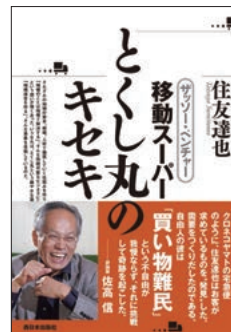
とくし丸のマニュアルに、“売りすぎない、捨てさせない”という言葉があります。食べきれない量の食材を買おうとするおばあちゃんには、売り止めをしています。短期的、表面的な関係性からでは生まれない発想です。

今後、ますます日本全国で高齢者比率は高まり、地方都市ではインフラの効率化≒脆弱化、都市部では高齢者数の拡大する時代が迫っています。2019年7月現在、約430台のとくし丸の移動スーパーが全国44都道府県で稼働していますが、まだまだ台数が必要です。

我々とくし丸は、より多くの“買い物難民”のサポート、見守り活動ができるよう、今後さらにエリアの拡大とサービス向上に努めたいと思います。

なお、今回いただきました賞金は、社会貢献活動、時には人命救助を実際に行っている、全国の販売パートナーの皆さんに何らかの形で全額還元させていただきます。

執行役員 SV 部 部長 荒川 伸太郎



▲とくし丸のキセキ表紙



▲車両



▲販売風景



▲移動スーパーの中身



認定 NPO 法人難民支援協会



代表理事
石川 えり

東京都

母国の迫害から逃れて来日する難民に対し、来日直後から自立に至るまでの道のりに寄り添い、総合的支援を行うために1999年に設立した認定NPO法人。一人ひとりへの支援とともに、難民を受け入れる社会を作ることも目指している。

具体的な活動内容は、①法的支援難民申請手続きに関する情報提供およびサポート②生活支援：カウンセリングを通じた医食住の確保、緊急支援金の支給③就労支援：就労資格のある方への日本語やビジネスマナーを学ぶプログラムの提供と企業とのマッチング④コミュニティ支援：難民と難民が暮らす地域がともに暮らせるための取り組み⑤政策提言／広報活動：NGOや政府との関係構築や政策提言、社会に向けて認知を広げて理解を深める活動に取り組む。難民への直接的な支援と同時に、難民を受け入れる社会を目指している。これまでに70か国・6,000人以上の方々を支援してきた。

この度は、社会貢献支援財団より社会貢献者表彰を賜りまして、心より感謝申し上げます。さまざまな分野でご活躍の方々とともに表彰いただけたことは、たいへん光栄であると同時に、皆さまの活動内容の一端に触れることができたのはとても有意義で貴重な機会でした。当日の式典には、長年当会を支えてくださっている支援者やボランティアの方も出席し、多くの方々に支えられていただいた賞であることを実感しながら、ともに表彰の喜びをわかちあいました。

難民支援協会は、紛争や迫害から日本に逃れてきた難民を支援している団体です。ちょうど20年前、自力で日本に逃れて難民申請をする人たちが約300名にのぼったことが国会で取り上げられ、16人が難民としての認定を受けるなど、国内の難民問題に対して関心が高まり始めました。しかし、迫害を逃れて、やっとの思いで日本にたどり着いた難民の方々の待ち受けていたのは、受入れに対して日本の消極的な姿勢でした。難民として認定されるあても乏しく、就労許可もなく、多くの人は家族からも離れて暮らすことを余儀なくされ、迫害の待つ母国へ送還されかねない恐怖に怯えながら過ごさなければならない状況でした。その状況を傍観するに耐えず、同じ人間として支援したい。そんな思いから、難民支援協会は難民への総合的な支援を行う日本初の団体として発足しました。

2018年の難民申請者は10,493人、難民認定を受けたのはわずか42人。残念ながら、難民が直面する困難は20年前と全く変わっていない、と言ってもよい状況です。それでも、以前に比べて認知も少しずつ拡がり、支援の手を差し伸べてくださる方が増えたおかげで、難民支援協会の支援活動の幅も拡がりを見せています。法的支援や生活支援のカウンセリングに加え、自立に向けたプログラムやコミュニティへの定住に向

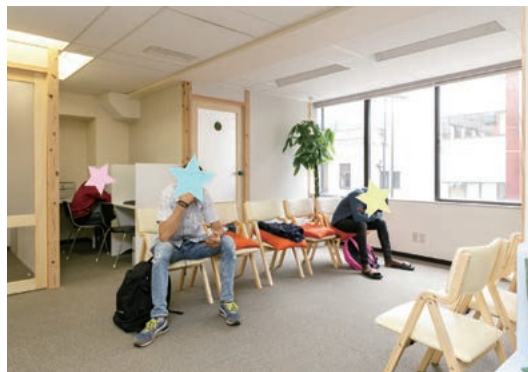
けた取り組みも行っています。

私たちの事務所には、年間約700人の難民の方々が訪れます。来訪される難民の半数はアフリカの方々の、アフリカの国々にある紛争や人権侵害と日本が地続きでつながっていることを感じます。来日直後の人、就労許可を得て働き始めた人、難民として政府からは認定されず苦しい思いをしている人、認定されて新しい人生を歩みだした人などさまざまな局面にいる難民の人たちがいます。難民の方たちは支援されるだけではなく、社会に貢献したいという気持ちを強く持っています。難民が安心して社会の一員として受け入れられ、ともに生きられる社会を目指し、今後も活動を続けて参ります。社会貢献者表彰を通じて、日本における難民の方々に光を当ててくださったことは、とてもありがたく心より感謝申し上げます。

代表理事 石川 えり



▲カウンセリングを通じた個別支援



▲事務所で過ごす難民の様子



▲事務所で提供する食料品



▲就労を目指し日本語を学ぶ難民の方たちの様子



▲多言語のゆびさしメディカルカード

吉成 麻子



千葉県

現在、ファミリーホームを運営し、2歳から小4までの6人の子どもの養育を行っている。これまで16年間で15人以上の子どもと暮らしてきた。里親に登録したきっかけは実子の同級生にネグレクト状態の子がいたことで、自宅で一緒に食事をしたり入浴させたりしていたが、男の子の保護者から苦情が出て、市役所や県庁に相談したところ、里親になることを勧められた。

これまで関わった子どもたちはみな、実親のもとに帰っている。国籍も様々で東南アジアや南米の子を委託されたこともあるという。4人の実子より低年齢の子どもを受け入れ、なかには生後6日目の新生児もあり、乳幼児を中心に育ててきた。

3年前からはより大きな家庭をめざしてファミリーホームに移行、障がい児も含む乳幼児を積極的に受け入れ、地域の人たちの助けを借りながら子どもたちを養育している。さらに昨年、乳幼児の養育者支援を行うNPO乳幼児家庭養育の会を設立し、千葉県の里親支援機関に認定された。毎月の里親ランチや道産子乗馬、四季折々の農業体験を通じて里親の親睦・互助を図っている。

この度は栄えある社会貢献者表彰を受賞させていただき、心より感謝申し上げます。

家庭という極めてプライベートな空間で子育てを何年もするなか、自分の子どもたちと一緒にそのお子さんもお預かりして養育するという地味な暮らしにスポットライトを当てていただいたこと。まさに晴れがましいレセプションで笹川陽平日本財団会長の言われた「自然の発露」でやってきたことが「皆で皆を支える」有意義な活動として評価されたことは、私はもちろん、全国で日々、社会的養護のお子さんたちに携わる大勢の方々の励みになったことと嬉しく思います。

養育里親を始めたのは20年近く前、長女が小学校に上がった時に同じクラスに虐待を受けているお子さんがいたことがきっかけです。登録してから徐々にお子さんを児童相談所から委託され、これまで15人、最年長5歳、最年少生後6日の国籍も様々な子が最短1週間、長期では7年以上、我が家で暮らしています。家族背景はまちまちですが、ネグレクトなどの虐待ばかりでなく親御さんの精神疾患や知的障がいなどで養育が困難になり保護されるケースも多いです。県から里親手当が支給され、医療費や学校の給食費などは無償です。実親さんと面会のあるお子さんがいる一方、両親が行方不明など、会うことが一切なく、顔も憶えていないことも。

3年前に里親からファミリーホームに移行しました。気づけば実子は成長し自分も乳幼児を育てる適齢期を過ぎて、今後どのようにすれば引き続き小さいお子さんの養育に関われるか、加えて障がいのあるお子さんが施設に大勢いるという現実にも触れ、できればハンデのあるお子さんとも一緒に暮らせないかという思いで認可を得ました。現在は2歳から10歳までの6人のお子さんを委託されています。うち2人は生後



1か月からお預かりしていて、2人は知的な遅れがあります。近所のママ友や若い友人、農家さん、小学校の元先生や地域の小児科医、保健師さん、社会的養護出身の若者、そしてもちろん家族の手伝いに加えて、折に触れて訪ね歩くいろいろな地方の大勢の皆様に応援に支えられ、毎日があつという間に過ぎていくのが今の私の現状です。

7月の表彰式では高校の恩師をはじめ尊敬する同窓の先輩方、全国各地の様々な活動をされている方たちと一緒に受賞することが叶い、分野は違えども信じることに邁進する大勢の尊敬すべき皆様とのご縁を頂戴して、人生の大いなる糧となりました。今後はお子さんたちの養育ばかりでなく、家庭復帰後の実親の支援や、里親・特別養子縁組された養親と互助体制を構築して、乳幼児を育てる人が助け合いながら楽しく親子で暮らせるコミュニティの実現を目指したいです。

昨年設立したNPO乳幼児家庭養育の会のメンバーとともにこれからも次代を担う子どもたちの健やかな成長を願って、やれることをひとつずつできたらと受賞を機に決意を新たにいたしました。

感謝をこめて。



▲キックボクサーの那須川天心さんと一緒に



▲愛馬・道産子サクラと岡部元・騎手



▲宮城県石巻市でホヤ収穫の見学



▲山形県河北町でさくらんぼ祭り



▲赤倉スキー場で雪遊び



▲北総農家で恒例のじゃがいも掘り

刈谷保護区協力雇用主会



会 長
野々山 賢一

愛知県

刑務所、少年院等を出所した人をはじめ、保護観察対象者を雇用し社会復帰や再犯防止に繋げている民間の事業主（協力会社）の団体。全国で登録している協力雇用主は約20,000社。積極的に雇用していくためには地域の理解が必要である。全体で見ると離職が多いゆえに継続的な就労定着支援が必要である。

刈谷保護区協力雇用主会は、2007年に愛知県内の刈谷市と知立市の地域に所在する協力雇用主を中心に発足した。現在、刈谷保護区の協力雇用主は24社。これまでに雇用した人数は40名を超え、それぞれ社会復帰に繋がっている。刈谷保護区協力雇用主会は警察、保護司、役所等との連携が取れており、受け入れ態勢等が整っている。

犯罪のない地域社会を築こうとする啓蒙活動の一環として、毎年7月に「社会を明るくする運動」として保護司会、更生保護女性会等と連携し、市内各地で啓蒙物品を配布、多くの市民に地域社会の理解と協力を呼び掛ける活動もしている。

(推薦者：刈谷市役所 生活福祉課)

罪をなぜ犯したのか…。

「空腹だった、お金がなかった、感情が高ぶった」確かにその瞬間はそうだったかもしれない。だからと言って人は一般的に事件を起こさない。一般的ではない日常やしがらみがあって、尚且つ非常に根深い事実を抱えているからこそ事件が起きる。私は活動を通じてそんな事実を多く知った。

協力雇用主会は企業からなる会員数全国約2万社。再犯を起こす者は無職である間に罪を犯しやすいことから罪を犯した事実を承知の上で雇用受け入れをする更生保護団体です。私たちは雇用受け入れをすれば良しとされてきています。しかし、職があったとしても悪しきしがらみから解放させない事には罪を起こさない人格にならない、職の提供だけは根本は変わらないとの考えを私自身持っています。就労を通じて社会性を身に付けてもらうことも当然ですが、対象となる人の状況や心理を把握し、悩み、問題があれば解消にあたる事が私たちの活動の柱となっています。

対象者の問題点改善にあたり、社会学、教育学、心理学、医学、法学、信頼性工学などありとあらゆる知識が必要です。刈谷保護区協力雇用主会では独自に各分野有識者の意見を頂ける環境や実働して頂けるネットワークを構築してきました。保護観察所を起点とし、保護司会、更生保護女性会、地元警察、関係諸団体の連携も強固です。刑務所等の刑事施設との意見交換ができる機会もあり、対象者に合った更生計画も立てられます。これまでに多くの対象となる者が更生を果たしてきました。

更生させたい一心で活動する私たちですが非常に困難な事案が多く、活動の糧となるべきモノが得られにくい分野の一つであり、私を含め会員のモチベーションの維持



も肝要です。そのような中、社会貢献者表彰を受けたことは私どもの会員の士気高揚に繋がりました。悩みながらの活動の繰り返しでしたが大きく自信に繋がっています。私たちのすべきことは山のようにあります。世界一安心安全な日本を目指してこれからも邁進していく所存です。

最後に、授賞式を通じて多くの社会貢献者の方々と出会えたこと。それは、そんな方々によってこの日本や世界が支えられていることを改めて実感する機会となりました。皆様の熱き想いと信念が今後も益々と発展し更なるご活躍、ご健勝を祈念申し上げ結びとさせていただきますたく存じます。

会長 野々山 賢一



▲刈谷保護区協力雇用主会設立10周年記念式典



▲平成30年 社会を明るくする運動



▲平成24雇用主会総会の様子

公益財団法人阪喉会



理事長
上西 洋二

大阪府

喉頭がん等により喉頭摘出手術を受け、声帯・言語機能を失った人に対し、代用音声による発声練習の指導や発声指導員の養成研修、喉頭摘出者専用の発声補装具や専用の日常生活用具の研究・製作、販売、並びにこうした身体障害者の社会参加の促進を図る目的で1946年に設立された。このような会は、当初、日本はもとより世界でも初の取り組みだった。

また、喉頭がんの一次予防としての禁煙運動の支援事業も展開している。言語機能喪失者の代用音声として、食道発声法、笛式人口喉頭発声法、電動式人口喉頭発声法、シャント発声法などがあるが、器具を使用せずに発声する食道発声法が主流となっている。これらの各発声法を、肥後橋教室、大阪大学付属病院発声教室、大阪国際がんセンター発声教室の3か所で、上達度合いによりクラス分けされ毎週開催されている。阪喉会は、講師も事務方も全てボランティアによって運営されている。

機関誌を作成して、年間行事の様子や会員からの投稿などを掲載している。話せないことによって引きこもりになる人も多いため、一泊旅行などを計画して外に出る機会を設け、悩みを打ち明け合う機会を作るなどしている。また、毎年5月の世界禁煙デーに合わせ、禁煙を訴えるイベントを行っている。この活動には大阪市の職員や国立がんセンターの看護師や医師なども参加しており、NHKも取材に訪れるなどして、毎年とりあげられている。また、受動喫煙についての厳しい条例制定に向けて大阪府への働きかけも行っている。

(推薦者：特定非営利活動法人日本喉摘者団体連合会)

公益財団法人阪喉会（以下、阪喉会）は、喉頭がんなどの切除手術で、喉頭を摘出され、声を失った者たちの患者会です。会員たちは、高齢者で、がんサバイバーで、言語障害の中途障害者という、いわば三重苦を抱えています。三重苦というと重苦しい感じを与えますが、代用音声という第2の音声言語を操って、生き生きと暮らす、楽しい仲間たちの会です。

私たちは無喉頭ですから、本来の音声言語は失って、回復できません。代用音声という技法を使って会話をします。代用音声には、器具を使わない食道発声法、シャント式発声法、器具を使う電動式人工喉頭発声法、笛式人工喉頭発声法があります。どの方法で話をする場合にも訓練が必要ですので、阪喉会の最も重要な事業は、代用音声の訓練のための教室運営になります。

阪喉会の運営を行うのも、教室で指導にあたるのも、すべて元患者である当事者です。先輩の患者が後輩の患者に代用音声での会話の仕方を指導します。その指導の内容は、先輩たちから脈々と受け継がれ、蓄積されてきた経験的な知識に基づいています。阪喉会は1949年に創立され、以来70年にわたり、活動を続けてきました。この70年にわたる先輩たちの活動の積み重ねが今日の私たちの活動を支えてくれています。

声を使って会話するというのは、人間にとってとても大切な手段です。命を守るためとはいえ、それを失えば、生活は混乱し、どうして暮らすか、失意のせいで途方に



暮れるほどのことです。それが阪喉会の教室に通って、代用音声での会話ができるようになってくると、元通りの生活や友だちづきあいを取り戻し、生き生きした暮らしぶりになってきます。私たちは高齢者の団体として、高齢者にとっての社会参加の大切さを、身をもって知っています。会話ができるようになれば、いろいろな社会参加の条件が整い、生き生きした暮らしが見えてくるようになります。

阪喉会は、今回、公益財団法人社会貢献支援財団の表彰を受けました。このことは、高齢者、がんサバイバー、障害者のために活動する多くの団体にとっても、とても励みになることだと考えています。超高齢社会となった日本では、今後、ますます慢性病で悩む高齢者や、障害を負った高齢者が増加していきます。そのような高齢者を支える患者会など、社会貢献を行う団体の重要さは大きなものがあります。阪喉会は、今後とも、その一端を担い続けることを誓います。それとともに、貴財団が高齢者のための社会貢献団体に強い支援の手を差し伸べられることを祈念いたします。

理事長 上西 洋二



▲ 毎 5 月 31 日 の 禁 煙 キ ャ ン ペ ー ン 実 施 風 景



▲ 6 月 第 一 土 曜 日 定 期 総 会 会 場 風 景



▲ 食 道 発 声 初 級 教 室 開 講 風 景



▲ 食 道 発 声 中 ・ 上 級 教 室 開 講 風 景